

招待席

# 池田克己

いけだかつみ 詩人。1912(大正1)年〜1953(昭和28)年。奈良県吉野生まれ。詩歴は古く1934(昭和9)年に22歳で早くも詩集『芥は風に吹かれている』を出し、人生的なバーバリズム(原始主義)の詩法に特徴が見られる。1946(昭和21)年、騰写版詩誌『花』を上林猷夫・佐川英三の3人で出し、高見順の詩をはじめて掲載した。1947(昭和22)年、菊岡久利・八森虎太郎・高見順・緒方昇らと詩誌『日本未来派』を創刊。1952(昭和27)年に病氣重態となるまで編集をほとんど一人で、高見順・土橋治重・港野喜代子・鷺巣繁男・天野美津子・八森虎太郎・高田敏子・坂本明子・内山登美子・武村志保・和泉克雄・窪田般弥らを世に送り出した功績が大きい。主な詩集に『上海雑草原』(1944(昭和19)年刊)、『法隆寺土塀』(1948(昭和23)年刊)などがある。掲載作は、『原始』(1940(昭和15)年豚詩社刊)と『池田克己詩集』(1948(昭和23)年日本未来派刊)より抄録し、総タイトルを「原始」抄とした。底本は、『日本現代詩大系』第10巻(1951(昭和26)年河出書房刊)に依った。

なお、作品中に促音表記の混在があるが、底本を尊重し、ママとした。

## 「原始」抄

《目次》

地理

手首

豚の辺ほとり

東京(第六番)

地理

私を取り巻いているのは何だ  
肉親だ  
枯木の多い庭だ

私は地球儀を廻す  
このあたりだらう  
新月の光に濡れて  
私がつつ立っているのは

### 手首

片一方の車輪にまるまつて柘榴のような手首がガラガラ  
角に突き当り、弾き飛び、砂塵を上げてころがって行つ  
た。

色上げしたやうな赤い月。

露に濡れた草花はみんなその方へまひ上つてしまふた。  
おんごくの蟻はそれを見てゐた。

ここに、

一つの町が増え、

人たちはむかふの山へ向ふて行つた。

豚の辺ほとりの

遙かな、

前方、

そのピカピカ光る山脈の起伏も、

湧きあがる乱雲の彩も、

日と共に太りゆく首を上げては、最早望み得べくもなかつた。

それは昔、

芋の子のように乳房にぶら下つて仰ぎ見た景色だが、そんな思出は今、誰彼の頭にもすれすれに薄れてしまつた。

《突如！ 首つ玉にからみついた投縄に顛倒した仲間が、潰れた鼻からヒリヒリ絶叫をあげて血の滲んだあの眼でこの世の最後に見たものは、ひよつとするとこの薄れ勝ちな記憶の光彩であつたかも知れない。いやそれだけは信じたい。》

日と共に、

この肉体は、この意志におかまひなく顎を前につんのめらせ、残飯の饅えた臭ひに近づけしめた。

自由な手足があれば、

照る陽に応えて、

せめて淡紅の皮膚を輝かせたいものを。

汚れは募るばかりだ。

こんな汚れた皮膚の下で醜酵しているものに、自分自身、何と慙愧に耐へぬものがあることか。

しかし、

見ろ、

向ふに、

われらと共に汚れ果てて、

猶もその肉体におかまひなく、

威張り散らしてゐる嫌な野郎が一人いるのだ。  
片手に棒を下げて、  
平気の平左で。

### 東京（第六番）

まくれあがつたうすべりの下はコンクリートの床  
ガラスのない窓枠に新聞紙

――寝たままで失礼

――ここは区役所土木課住宅係の管轄で

――東館は戦災者 西館は引揚者

――どの部室もこの通り 何しろもう一ぱいで

壁に焼痕が地図を描き

ひん曲つた赤錆びの手摺に

おしめの垂れている十一月の曇天

――それじゃあなたも塘沽タンクからで

――三船とは早かつたですね

――自分らは張家口の無蓋列車組で とうとう神経痛にや

られまして 還つてきてからはもう寝たつきりで

――そりやそうと 今度はいつ頃向うへ行けるんでしょう

か 何しろ年寄 子供まで 支那が支那がといひまして

露出した鉄筋にひっかけられた骨箱 華北交通のマークを

かがつたボロ服

寒風が錐揉みしている。

京橋区〇〇国民学校厚生アパート

Ikedata Katsumi

日本ペンクラブ 電子文藝館編輯室

This page was created on Sep 17, 2009



